



学校だより

～ ひびきあう心 かがやく笑顔 ふれあいの丘 斎藤分 ～

令和3年 6月 30日 7・8月号

横浜市立斎藤分小学校 校長 黒木 健

読書のススメ ～ 自分オリジナルの読み方を見つけてみよう ～

校長 黒木 健

梅雨明けが待たれる今日この頃ですが、本校保護者の皆様、地域の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。さて今月の学校だよりは、「読書のススメ」と題して、私オリジナルの本の読み方などについて、ご紹介をさせていただければと思います。

さて、皆さんは本を手にとって、それをどこから読み始めるでしょうか。小説、随筆、ビジネス書、文芸書、学習参考書、専門書など、本の種類も様々であるため一概には言えませんが、私の場合もしそれがあれば、「前書き」、「目次」、「後書き」、そして「本文中の見出し」の順で目を通してから、本文を読み始めるようにしています。そうすることの最大の理由は、「前書き（その本で明らかにしたい内容）」、「目次（全体構成）」、「後書き（結論や今後明らかにすべき課題）」、「本文中の見出し（本文の要旨）」等の各パーツから、作者が述べようとしている全体像により迫りやすくなるためです。見通しをもって読み進められるという安心感から、細部にまで目を走らせることができるようになり、結果として深い読みにつながったという実感を、これまでに何度となく経験してきました。また、この読み方をすることのもう一つのメリットは、文を書く際にも、「前書き」→「目次」→「後書き」→「本文中の見出し」といったイメージで文の骨子を形作っていくと、全体構成が整っている分、そこから頭の中に様々なアイディアも浮かびやすく、また自分が書こうと思っていた内容とのズレも少なくできることです。

では、学校でよく課題として出される読書感想文を一例に考えてみましょう。読書感想文を書き始める前には、その本の中で作者が最も述べたい内容が書かれている箇所や、また主人公の性格や考え方が最も現れている表現等に焦点を絞って、その部分と自分の考えやこれまでの体験等とを重ね合わせながら、何を書こうかと考えていくというパターンが比較的多いのではないかと思います。文部科学省「学習指導要領 - 国語解説」には、例えば、「文学的な文章において、5・6年生では、登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えること。」との記載があります。このようなことから、まずは、その「描写の全体像」を把握することで、登場人物の相互関係やその心情の変化などをよりの確に捉えることができるようになり、その結果、どのように書き始めれば良いのか、その具体的なイメージも持ちやすくなるのではないのでしょうか。

一冊の本もその読み方の視点を少し変えてみるだけで、これまでの自分の読み方から大きく飛躍させることだってできるはずです。読解力というと、たくさん本を読み続けることではじめて習得できる能力だと思われがちですが、必ずしもそうとは言い切れないのではないかと、これまで考えてきました。前半部分でご紹介した私オリジナルの読み方は、一つの例に過ぎませんが、どの角度からその本に入っていけば良いのか、自分オリジナルの読み方を見つけていくことは、これからの本との出会いの幅を広げていくためにも、大切なことなのかもしれません。夏休みなどのまとまった時間を使って、お子様が一冊の本にどのように親しんでいかれるのがベストなのか、ご家庭でもお子様との話題の一つにさせていただけたらと思う次第です。